

Significance and Challenges of "Exploring Written Culture" : Through the Period of Integrated Study "Tankyu"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉崎, 哲子, 高橋, 政宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029258

文字文化「探究」の成果と課題

—総合的な学習「探究」の実践を通して—

Significance and Challenges of "Exploring Written Culture"
-Through the Period of Integrated Study "Tankyu"-

杉崎 哲子¹, 高橋 政宏²
Satoko SUGIZAKI, Masahiro TAKAHASHI

(令和 4 年 11 月 30 日受理)

ABSTRACT

In the "Tankyu" class, students chose a theme related to calligraphy and writing, and proceeded with their exploration. Writing and writing are familiar to us, but there were a few things that each person wanted to explore. The students were able to not only explore by researching, but also actually write and explore.

1. はじめに

附属静岡中学校では、平成 26 年から第 3 学年の「総合的な学習」として、「教科の学びの本質を知る」授業、「追求」を開講してきた。附属静岡中学校において国語科は「言語や人間、社会、自然などについて自分がどう生きていくべきかなどを考える教科」と捉えられていた¹。

杉崎は、これまでの研究により、中学校国語科書写の方向性に関して、既存の学習指導の目標に加え「自分を見つめ自分を知り、自分を表現すること」の意義に言及していた²ことから、書写書道の見地が「人間形成のための学力を育む授業」と結びついて主体的な学びの保障につながると考え、これの開講当時から「追求」を担当してきた。

本研究は、令和 3 年度より「追求」から授業名が変わった第 3 学年の「総合的な学習（探究）」の実践について、その成果と課題を、担当の高橋とともに検討するものである。

1-1. 総合的な学習「追求（国語）」の内容（概要）

「追求（国語）」では、毎年半期に 1 講座（1 年に 2 講座）開講し、受講生の希望をふまえて授業内容を決めてきた。受講生の希望によってウエイトの置き方や成果物の形状は異なるが、いずれの回にも、後述の内容を含めることとして実施した。

初回には、「今の一文字を毛筆で書く」ことから始めて自己紹介を行い、次に主に楷書の字形要

¹ 国語教育系列

² 附属静岡中学校

素をクイズ形式で確認して書写学習の振り返りを行った。中学校国語科書写の学習内容である「行書」の特徴の確認を加えるだけでなく、高等学校芸術科書道への接続を意識して、整齊な文字の古典（初唐の三大家）の臨書への挑戦も加えてきた。それらの授業展開は、いずれも生徒の要望を取り入れ興味関心を重視して工夫した。代表的な実践とねらいを挙げる。

- ・「葉づくり」「団扇制作」「体育祭の応援メッセージ」／書写学習を暮らしに生かす。…ただし「正しく整えて(速く)」という書写のねらいだけでなく、自分なりの表現を目指すこととした。
- ・『書本』制作／個人の表現を共有したうえで、自分なりの解釈を加え言葉を紡ぐ。…書本とは、「絵本」の絵の代わりに書（毛筆文字）と文章を書いたもので、自分または友達の書いた文字から言葉を紡いで文章を添えた。「書の特質³」のうちの文字性を重視し具象化した。
- ・「大字書」「書道パフォーマンス」／大きく書くことによって、毛筆による「運筆の動き」や「気脈」を十分に感受できる。これに「身体表現」を併せて捉え、音楽を加えて仲間と協調して書いていくのが「書道パフォーマンス」である。時間的制限があって高校生が行う本格的な書道パフォーマンス⁴のようにはいかないが、皆で相談しながら紙面構成や動きを確認し合う過程を通して、個人の書制作にはない書制作の魅力を感じ取ることができた。

（成果物は、「附属校交流書写書道展」や校内の合唱祭や運動会、卒業式の際に展示した。）

1-2. 「追求（国語）」実践の意図と課題

「追求（国語）」を受講する生徒は、全員「書写（書道）」に対する関心が高い。しかし書写が得意な（書塾に通っている）生徒ばかりではなく、手書き文字に自信がなく毛筆書字に苦手意識を持っている生徒もいる。両者は授業に取り組む姿勢が異なっている。

- 書写が得意な生徒／成果物の出来映えが気になる。書塾と同様の指導を求めているのか、字形要素を見直すなどの理論的な改善方法を知るよりも規範の提示を望む場合が多い。それに応じた後は、練習に時間をかけたい生徒がいる一方で、自分の文字に自信を持っているのか面倒なのか、更なる向上を望む意識が希薄で、数枚書いて終わりにする生徒もいるというように、生徒の表れは個人差が大きい。
- 書写が苦手な生徒／成果物の出来映えを気にはしているが、これまでの学習で未解決だったことを知って上達を望んでいるため、字形要素の見直し等の理論的な改善方法への関心が非常に高い。練習時間の要求に多少の差はあるものの、皆熱心に取り組み、必ずしも規範文字を示すことを求めない。書道史や文字文化に関する情報にも興味を持っている。

国語科書写において「教科の学びの本質」といった場合、「書道」がそれに該当する。しかし教科名が「国語科」ではなく「芸術科」になっていることが生徒には伝わっていないために、授業者のねらい「生徒に知らせたい本質的な『書』の学び」と生徒の「国語科書写の本質」に対する認識とに「ずれ」が生じている。

「追求（国語）」の授業の中では、書写と書道の違いについての説明を加えているが、書塾に通っている生徒の場合は、芸術科目としての「書道」ではなく、示された規範文字を真似て練習する「お稽古ごと」と同様の学習を「書道」と捉えていることが多い。一方、書写技能に自信のない生徒の場合は、単に「手本（規範）」を見て書くという従前よく行われていた書写学習では解決しないことを承知しているため、それ以外の方法（字形要素を知るといふ、本来の書

写の学習内容)を求めており、これが杉崎の提供する「追求(国語)」の授業と合致していたと考えられる。また、多様な筆記具や横書き書字等、昨今になって、ようやく扱われる機会が増えてきた学習内容に関する情報提供も刺激的であったと思われる。

このように、生徒の取組みの姿勢に差はあるものの、「追求(国語)」の実践には、一定の成果が認められた。特に「書道パフォーマンス」は、単に「文字の整齊さ」を追い求めるだけでなく、身体運動も含めた運筆の動きを仲間と協調しながら体感し表現するという魅力的な活動であることから、中学校国語科書写でも高等学校の芸術科書道の授業でも扱わないが、この授業の集大成に位置付けた。これに対しては、上述のどちらの生徒も望んで積極的に取り組んでいた。ただ時間的な制約があって一発勝負になるため、自分の書いた箇所が不満足な場合は、仲間に迷惑をかけたと負い目を感じる。書き手全員が、その成果物の出来映えに満足できることは難しいので、「書道パフォーマンス」は、最終的な出来映えよりも「書く」に至る過程の、対話的な活動段階にこそ意味があると考えられる。コロナ禍になってからは、距離を保つでの共同制作は不可能で大字も個人制作に留めざるを得なくなった。そこで、個人の制作物を展示することをゴールとして個人作業を段階的に進めていくようにしたところ、自分のペースで自分の目指すゴールイメージに向かって完成度を高めていく生徒達の姿を確認できた。

ここで、「追求(国語)」の課題を指摘したい。「追求」の授業での大きな課題は、生徒が課題に対して受動的になる傾向があることである。その大きな原因として、「追求」で学ぶ内容が高い専門性に基づくものであることが挙げられる。「追求」の講師は、専門性の高い内容をかみ砕いて基礎から1つ1つ生徒に伝えようとする。しかし、生徒は講師から次々に出される課題をこなすことに精一杯になってしまう。またその結果、生徒は学びに対して見通しがもてず、講師の指示を待たないと学びに向かえない状況が確立してしまっていたと考えられる。

ゴールイメージは生徒の既存の知識や技能によって形成するしかないため、生徒の主体性を重んじて興味関心を重視することと「教科の学びの本質」を捉えることとは、必ずしも合致できるものではない。そこに時間的制限が加わるので両者の距離を縮めるのは難しい。これまでの「追求(国語)」においては、長期的な目標に向かって粘り強く追求する姿勢を示す生徒は少なく、主体的に創意工夫し表現を追求するという点では物足りないものであった。

2. 「総合的な学習『探究(国語)』について

2-1. 「総合的な学習『探究』」設定の意図

静岡大学附属静岡中学校の令和4年度教育課程「教育課程編成の基本方針」には、「本校の教育活動をさらに充実、発展するために」の、校訓、学校教育目標の具現として、「(1) 研究の方向性にそって、子どもたちの学びをさらに充実したものにしていこうこと (2) 子どもたちが、仲間とともに学校生活を創りあげる活動を支えていこうこと」と記されている。

教科の学びを研究する中で、子どもたちの追求活動が教科の枠を飛び越えたり他教科との結びつきを必要としたりする場面に出くわすことがある。このような表れから、子どもたち一人一人の生活や、教科の授業において生まれた切実な思いや探究心を大事にしながら、教科の枠にとらわれずに追求する時間の必要性を実感している。また、子どもたちがこれから生きていく社会では、現代的な諸問題について、探究的な見方・考え方を働かせながら、課題を解決したり自己の生き方について考えを深めたりすることが欠かせない。

そこで、静岡大学附属静岡中学校では、よりよく生きていくための資質・能力を育成するた

めに、総合的な学習の時間において、日常生活や社会の中で人とかかわることで見いだした課題について教科の枠を越えた探究的な学習を行うこととし、3年間の子どもの成長や発達段階を鑑み、弾力的・段階的に手だてを講じていくことが望ましいと考え、次のように展開している。それが、①「3学年縦割りのキャンプ（附中キャンプ）」、②「第1学年総合生き方」、③「第2学年総合（地域）」、④「第3学年総合（探究）」の4つの活動⁵である。本論では、④「第3学年総合的な学習（探究）」での実践について述べる。

2-2. 第3学年「総合的な学習『探究』」

今求められる力を高める総合的な学習の時間とは、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしており、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものである。

附属学校の最大の特徴である「大学との連携」をできる限り活用し、中学校の教科の学びや、教科の枠組みを横断するような学際的な内容について、より発展的に探究したり自己の思いをより表現したりしたいという子どもの思いに応えるため、「学びの充実に向けて、教科の深化、発展的な探究の時間」として、発展的なテーマを「探究」する時間を設定した。

◆「探究（国語）」の展開

この授業では、各自が自分の決めた「テーマ」について、資料を調べたり講義を聞いたりするだけでなく、自分で目標を立て見通しを持って毛筆や硬筆等で制作することによって探究する。

第1回から第5回までは、最低限知ってほしいことを一斉授業の形で押さえ、第6回と第7回では各自が興味のある内容を調べながら自分のテーマを決定していく展開とした。最終的には、①調べたことをまとめた「パネル、ファイル」と②軸、折帖、彩玉ボード、色紙などの「作品」、その両方の成果を「展示」という形で発表する。それを鑑賞し合って、「探究」を共有する。

2021年度「探究（国語）」スケジュール

	内 容（一斉実施）	授 業 形 態
—	ガイダンス	概要説明
1	探究テーマ希望調査、 書写学習確認（字形・楷書） 書写と書道、書風	学習形態と手順・ 方法（説明）、 演習（確認）
2	文字文化（書体の成立、変遷など） 用語の理解	基礎知識の確認 高校講座（NHK）
3	書写学習の確認（筆使い・行書）	演習（確認）
4	文字と印象（認知、文字表現の特質）	演習（確認）
5	実用書（書式等）	演習（確認）
6	用具・用材、筆記具の性能	調べ学習
7	フォント、書体、書式など	調べ学習
8	= レジューメ作成	各自作成
9・10	情報共有（発表）➡テーマ設定	→アドバイス
11	調査～表現への流れ決定	→アドバイス
12～14	制作1～制作3	→アドバイス
15	中間発表～修正	個人、相互
16～18	探究活動1～探究活動3	→アドバイス
19・20	最終発表準備（表装、額入れ）	裏打ち、表装指導
21・22	最終発表会・年間の振り返り 文字文化の探究	個人～全体共有 まとめ

3. 一斉課題での取組みとその効果

3-1. 「自分の文字の形成過程」の確認

「探究」の受講生も、大学生への調査⁶と同様に「文字が書けるようになった時期」は4～5歳が最も多く、それについては親や兄弟など家庭内での学びが最も影響が大きかったと答えている。その後、手書き文字自体は、小学校低学年から高学年まで徐々に変化し、中学校に入るとさらに大きく変化している。その原因について、文字数の増加や筆記具の変化等と分析していく。これによって、本講座が特別な「書道」ではなく身近なものとしての「手書き文字」や「文字を手書きすること」を捉えることを理解し、徐々に興味関心が高まったと考えられる。

3-2. 書字速度や書式による字形の変化の体験

シャープペンシルを用いて同じ文章を縦書きと横書き、それぞれ「いつも通りに書く」「速く書く」「ゆっくり書く」を体験して計測し、文字の変化を分析させたところ、ある生徒は、同様に水性ボールペンでも試したと報告してくれた。

生徒の記述の一部

<シャープペンシル (0.3ミリ芯) >

- ・縦書き／「いつも通りに書く (49秒)」文字と「速く書く (27秒)」文字とを比較し、少しずつ省略している部分があること、字間が狭くなっていることを確認している。「遅く書く (54秒)」では、筆圧が強まったのか線が濃くなっている。
- ・横書き／「いつも通りに書く (37秒)」横書きは縦書きよりも字間が狭くなり、「速く書く (28秒)」と殴り書きになったが、「遅く書く (54秒)」と丁寧さが感じられる。

<水性ボールペン (0.4ミリ芯) >

- ・縦書き／「いつも通りに書く (46秒)」場合、シャープペンシルで書いた字と差はないが少し速い。「速く書く (27秒)」と雑になる。「遅く書く (59秒)」と文字が大きくなっていった。芯が0.1ミリ太いことが関係しているのだろうか。
- ・横書き／「いつも通りに書く (35秒)」字間が少しずつ広がっていった。「速く書く (26秒)」と雑になった。「遅く書く (1分)」と文字自体の幅も広がっていった。

ここでは、速書きは横書きの方が縦書きよりも字形損傷が大きいことを確認している。字形だけでなく字間や文字の幅にも着目し、「字間から大体の書字速度が分かるのではないか」と指摘しているところは、こちらの予想を上回る鋭い気づきである。また、筆記具の違いによる字形の変化かと予想しつつも比較における条件統一の必要性に気づき、「芯の太さを統一すべきだった」と記して「0.5ミリ芯」との差も気にしている。体験して分析をしたことによって、生徒の「探究心」が深まっていったと考えられる。

3-3. 「書」の印象のAIによる診断

高等学校芸術科書道の教材である「書の古典」の画像⁷の選出から始め、一方で印象を表わす語を特定して古典の文字と印象の語との紐づけを行って機械学習を実施するという方向で、毛筆文字の印象の定量化を実現した。そのシステムを活用して、中学生の書いた文字について、それぞれの印象の語と対応させた学習データの例を挙げ分析した⁸。その一部を紹介する。

重厚／生徒の文字と「重厚」と紐づけた古典

(81%)	松風閣詩巻	自書告身	多宝塔碑

明るい／生徒の文字と「重厚」と紐づけた古典

(77%)	枯樹賦	爨宝子碑	屏風土代

注) %はAIが「重厚」、「明るい」と判断した割合

く、縦画であっても、下方にいくに従って太くなる、あるいは堂々とした線質で足元を固めている状態を捉えて「重厚」と判断したと考えられる。

点画によって囲まれた部分の空き(画間)が広いと明るい印象を受ける。「爨宝子碑」の「朝」は隙間が空いているわけではないが、「朝」の左部分の上にある「十」とその下の「日+十」との間隔が広いために明るさを感じる。「屏風土代」の「閑」は、門構えの中に隙間をゆったり確保して木を書いている。これらを総合すると、この「翔」では、点画が接しないように書かれている特徴を捉えたと考えられる。

同じ字を書く場合、幾ら書き方を変えても、他者が感じる印象には大きな差は感じられない。特に、これまでに書写学習を経験している生徒達の場合は、一文字全体をみて字形が整齊か否か判断しており、どの点画の特徴が整齊さを成立させているかを意識してはいない。しかし人工知能は「字」として認識していないために、同じように書いた文字であっても同じとは認識せず、異なる特徴を捉えて判断する。どのような特徴に注目したかを洗い出していくと、「印象」について、これまでには気づけなかった捉え方がみえてくる。自分が書いた文字について、AIによる「印象」の診断結果を知った生徒達は、点画の長さや方向に注目し、自分の意図した書き方を振り返りながら「印象」を際立たせる表現について考えるに至ったといえるだろう。

4. 個人の「探究」

4-1. 「探究」への手立て

<資料の扱い方、参考書などの紹介>

個人の「探究」について、生徒に対しては「少なくとも1冊(雑誌の場合は1つのコーナー)を選んで書き留める」ように伝えて参考資料を用意した。なぜなら、中学校には「探究」に必要な資料がなく、iPadでは到底検索できないからである。iPadは手軽ではあるが、「書体の変遷」や「五書体」の特徴、また「有名な書」について検索しても、商業書や俗っぽい書の方が優先的に検索されるようになっており、書道史をふまえた正統的な情報にはなかなか行きあたらない。そこで、主に書道専門の雑誌『墨⁹』を準備していった。顔真卿を選んだ生徒は書塾でも熱心に取り組んでいるが、他の生徒が空海の「飛白体」や王献之の書に惹きつけられたのは、いずれも『墨』に掲載されている書の画像に着目し、そのページの記述をしっかりと読んだからである。「仮名」をテーマに選んだ生徒は、仮名を特集した『墨』を何冊も読んでいた。

<同一文字の異なる結果>

臨書した文字をAIに診断させた結果では、下方に横画や左右払いがあるという共通項を「重厚」に結びつけていることを確認した。「重心が低いこと」が、この「翔」や元データの古典で裏づけられる。特に顔真卿の「有」の「月」では、はねの手前部分を膨らめて書き、「息」の「心」では反り部分を太く書くことによって、重心が低くなっている。下方に幅のある画(横画や左右払い)があるか否かではな

書写体と活字体の関係や手書き文字の印象、墨の色に着目した生徒に対しては、認知心理学や視覚心理学の書籍や文献を見るよう勧め、デザインとの関係性に注目した生徒に対しては、フォント開発の資料¹⁰に加えて商業書の先駆けである中村不折¹¹に関する書籍を紹介した。

また、多様な文字という観点から、ハングル、ミャンマー文字など、現代の外国の文字について興味を抱く生徒もいた。そうした文字に対して、最初は「別の国のもの」という意識が強かったが、江戸文字、勘亭流、寄席文字、浄瑠璃文字、籠字、角字、歌舞伎文字、相撲文字など、日本人も昔から文字の形を工夫してきたことを知り、親近感を抱いていったようである。書体の変遷を知らせた後には、篆書について、また、ヒエログリフ、古代シュメール文字、バビロニア文字、ピロス文字などの古代文字の存在を伝え、iPad を活用して調べるよう促した。

4-2. 「書の大家」の書から

ここでは、「書の大家」の作品（古典）からスタートした生徒の「探究」について述べる。

○顔法と整齊さ

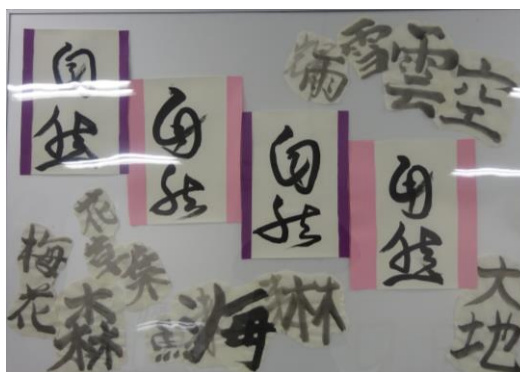
生徒Aは書が大好きで、書塾で以前から顔真卿¹²の書を臨書しており、学校でも熱心に何度も書いて整齊な楷書で「真善美」を仕上げた。ただ、「多宝塔碑」だけを参考にしたのか、蚕頭燕尾に代表される「顔法」の特徴を捉えるには至らなかった。書写的な書き方と特徴を捉えやすい「建中告身帖」とを比較させて顔法の用筆を伝えたが興味を示さなかった。顔法の書道学習上の価値を理解することは中学段階では難しいのだろう。生徒Aは、自宅で書き額装した行書作品も持参し、書展の看板もこの生徒の作である。書制作に時間を割く関心や意欲の高さ、書法は素晴らしい。授業中も磨墨して書いている姿勢は、書の一特質の「精神性」¹³の探究であると解釈できる。

○王献之¹⁴の草書と見せ方

生徒Bは、題材を「自然」に決めるまでに、沢山の字を書き、「自然」も繰り返し書いていた。その結果、草書に重要な気脈をよく捉えられるようになった。崩し方を変えて書いていく過程で草書の用筆を探究していたといえるだろう。これは、特に書の特質の「時間性¹⁵」に関



生徒A（左は看板、中央は楷書、右は行書）



生徒B「自然」

係する。「一つの作品に絞るのが難しくなった」と訴えたため、並べてパネルに入れることを提案した。四方を囲むのではなく紙面の左右のみに色紙を張って広がり邪魔しないよう工夫し、作品の周囲には友人達に手伝ってもらった「自然」に関する語（淡墨）を位置に気をつけて散らした。書作品においては、文字だけではなく紙面構成や表装も重要になってくる。額の地色やその量、位置によって空間性が際立ち作品らしくなることを実感したに違いない。空間感覚とは、書作品の中でだけでなく作品全体を捉えていく過程で身につけていく。

4-2. 線質の面白さに着目

○墨色の違いと飛白体

墨色による印象に着目した生徒Dは、滲んでいると重く擦れていると軽いということに気付く。ただ、それでは字の形そのものにも違いが生じてしまって比較できなると考えて、作品では、普通の墨液で書いた「重」と淡墨（青墨）の「重」の字形を同じになるように書いた。書きながら、色の違いとは、墨の濃淡だけでなく線質の違いにも関係するということを発見していった。そこで、線全体がかすれている「飛白体」を紹介した。空海は、刷毛状の筆を使って飛白体を書いている¹⁶。能書家で有名な空海の遊び心に触れた途端に、書に対するイメージが大きく変わっていったのだろう。パネルに入れるにあたり展示時の見え方を意識して、アクセントになるように朱墨の「重」を加えたところも探究の成果といえる。



生徒C「重」

○文字で線を形作る

書には、書かれている文字そのものではなく字群として捉えて表現する方法がある。一般的にこの「字群」の捉えとは、例えば細字で円の中を埋め尽くすように長い文章を書いていくもので、仮名の散らし書きや漢字仮名交じり書の紙面構成において行同士をまとまりとして見えるように書くことと共通し、さらに発展させている。

生徒Eは、「喜怒哀楽」それぞれに関係する平仮名の言葉（オノマトペ）を埋めて一つ一つの点画を形成させた。書かれた文字の濃淡が点画に奥行きを与えるだけでなく、鑑賞者が文字の意味について捉えることができるという点において、書の特質の「文字性¹⁷」の探究に繋がっている。昨今、実体験の機会の減少に伴い感情表現が困難になっていることが指摘されている¹⁸。表現の視覚的な印象に留めず文字の意味に焦点を当てた生徒Dの「探究」は言葉を耕すことにも寄与できることを示唆している。



生徒D「喜怒哀楽」

4-3. 文字の印象を考える

○調査を仕組む

2名の生徒は、「人は印象をどのような文字表現に置き換えるのか」についてアンケート調査を元に探究を行った。いくつかの印象の異なる写真（葉の写真、桜の写真、海の写真など）を用意し、字形の異なるいくつかの文字のうち、どれが写真の印象に近いかを、30名ほどに対してアンケート調査を行った。調査にあたり、どのような写真と文字をいくつ用意すれば調査ができるか、どのような年齢層の方に調査するのが妥当か、調査時期はいつがいいか、質問はどのような表現が適切かなど、総合的に学びを関連付けながら探究していった。

また、調査した内容をパネルにまとめる際には、調査結果を示すだけでなく、調査に至るまでの字形の研究成果を添えることで調査の意義を引き立てようと努力した。その結果、例えば、葉の写真に対して人々が最も適切だと感じている「葉」という文字表現は、明朝体でかつ緑色で表現することであるのに対し、「笑」という文字はポップ体でオレンジ色の表現をするという違いがあることなどに気づいていった。このことから、人は文字ごとに異なる表現を好み、なおかつ人の好みにはある程度の傾向があることを見出していった。

4-4. 文字文化としての捉え

○毛筆の運筆と刻すること

一斉授業で漢字の五書体とその変遷について触れた際には、篆書と草書に多くの関心が集まった。生徒達は、それらの特徴を知識として得たいわけではなく、自分の決めた題材文字を五書体で書き、それぞれの印象を受け止めることに意味を見出していた。生徒Eは、崩し方の異なる草書3文字を書いて並べて印象の差を表現していた。この作品制作では、形の変化を捉えただけでなく、筆の穂先が広がりやまとまりして表出される線の豊かさを感じ取っていた。

生徒Fは草稿に書いた「釣」の文字の線質をボードに刻して再現しようと努力した。文字を刻すことは、硬骨の時代から文字を書くことと密接に結びつきながら、書を現代に伝えてきた。書法と同じように刻法にも伝統があり、刻すという行為によって立体的な「書」が創り上げられる。書に関する探究とは、調べるだけでなく、書いたり刻したりして深まっていく。

○文字文化の感受

古代文字について探求する場合も、同じように、実際に文字を書く活動を通して実感し理解につながっていった。生徒Gは、最初は「あ」から順に文字を並べて書いていた（赤用紙）のだが、一覧表ではなくメッセージを書いた方がいいとアドバイスしたところ、青地の用紙にメッセージを書いた。その両方を展示したことによって、鑑賞者に解読する体験を提供することになった。昔の人も外国の人も文字を書いてコミュニケーションをとっていたということを感じ、さらに文字を使って楽しむことも可能になった。

漢詩を整然と細筆で書いた生徒Hは、これを完成させるまでに故人の功績を記した「墓誌銘¹⁹」や光明皇后の臨書による「楽毅論²⁰」を熱心に調べていた。生徒Iは仮名をテーマにし、画仙紙を短冊状にして連綿や変体仮名も加えて三種書き、生徒Jは色々な表情の「音」を書いた。生徒個々のテーマは異なるが、ど

の時代、どの地の人々にとっても暮らしの中で書や文字は重要であり、目的に応じて活用されてきたことを感じ取ることができていた。



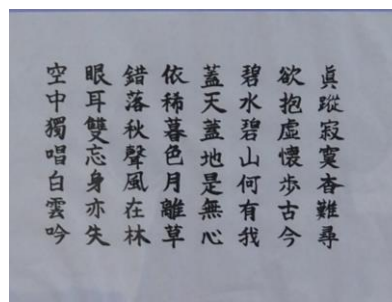
生徒E「怨」



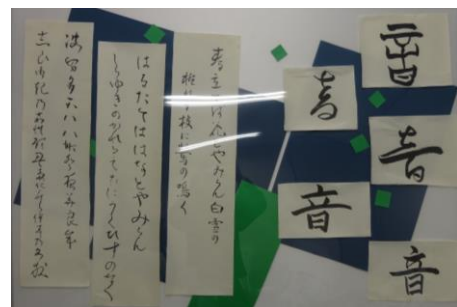
生徒F「釣」(下は刻字)



生徒G「ヒエログリフ」



生徒H「仮名三種」



生徒I「仮名三種」

生徒J「音」

5. 「探究（国語）」の成果と課題

5-1. 成果とそれを生み出した要因

生徒達は、書写学習の確認からはじめ、共通課題に取り組むなかで各々がテーマを設定していった。成果物の展示（発表）を意識してからは、取り組みの姿勢が変化していき、書きながら気づいていく様子も確認できた。裏打ち作業では水分量によって画仙紙が伸縮することに驚き、作品表装の過程では額やパネルの地色が余白と墨色とのコントラストを浮かび上がらせることを実感していた。ただの展示ではなく、美を意識した装飾を加えた「見せ方」が重要であることを知り、展示段階でも「探究」の兆しが見られた。回を追うごとに主体性が高まり「探究」の成果を確認できた。さらに家庭でも探究に関する取り組みを自主的に行う姿も見られた。

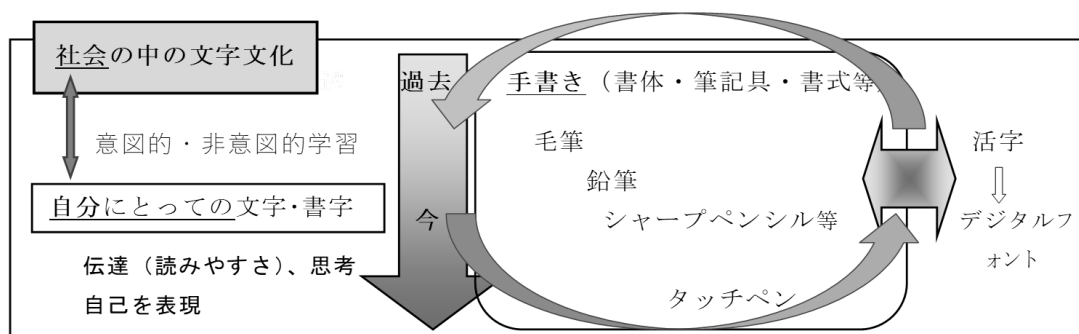
この状況を生み出した要因を整理すると、最大の要因は「追求」の時に指摘されていた時間的な課題が克服され、一年間通して取り組めるようになったことだろう。それによって、前半に一斉授業を行って基礎的な内容を理解することが可能になり、後半に「探究する」に値するテーマを設定できた。探究するという学びの文脈の中に基礎学習が位置づけられているため、基礎学習に対しても主体的な取り組みが見られたと考えられる。

また、「展覧会の開催」というゴールイメージが、探究を発信するという有用感に繋がった。展示用の部屋を確保したことによって、一斉作業として探究の歩調を細かく合わせることなく制作できたところまでをその状態で取り置くことができた。それは、各々自分のペースで取り組めるだけでなく、次回のスタートを円滑にするという点においても有効であった。

5-2. 書写・書道が「探究」に有効であった理由

「探究」で取り扱ったのが書写・書道関係の内容であったことも成果と結びついている。文字を書くことは誰しもが行っている。初めに自分の文字の形成過程を振り返り、自分の文字を自己分析したことによって、改めて身近さを認識していく。「文字文化を意識する」とさらに身近さが増して自分の探究課題となり得る。書写が得意で好きな生徒はもちろんだが、書写が得意ではない生徒にとっても、篆書や隸書等の書体の変遷は興味深く、さらに飛白体やフォント、他国の文字など、テーマを設定しやすかったと考えられる。既習の書写学習に対する拘りが強くないため、芸術科書道に対する視野が限定されていないとも考えられる。毛筆だけでなく、硬筆であっても文字文化を意識できる²¹ところも取り組みやすい要因である。

「文字文化を意識した硬筆書写イメージ」



書字活動は自分の思考や感情の表現ツールである。根底に「見せる以上いい作品を作りたい(うまくなりたい)」という思いがあって、表現活動に対する意欲に繋がっている。更に重要なことは、表現活動とは、ゴールへの到達だけでなく、そこに至るまでの過程に意義が認められることである。そして、その過程については横断的多角的な見方が可能であり、各自の興味関心によって、文学や美術との関係、心理学や科学的な捉えが可能であるという特徴に起因する。

成果報告 (一部)

テーマ	気 づ き
筆記具の違いによる文字の雰囲気の違い	文字には見せる文字と読ませる文字とがあることが分かった。見せる文字とは筆やマーカーで書く文字で、その文字には、力強さや勢いなどの気持ちが込められ、見ている人に伝わると思う。逆に読ませる文字は、相手に伝えたい内容を伝えるのだと思う。
筆が与える文字の印象	三種類の筆で「咲」と書いた。太い筆は強く、小筆は小さく弱々しい感じだが、少し力を入れて書くと弱いようでも強くみえることが分かった。
書と私	日常生活であまり意識していないフォントや色使いなどに注目して、その文字や隠れている意味について考えた。より客観性を持たせるために、先生方にアンケートを行った。その結果、視覚的な印象が鍵になることが分かった。象形は強く印象に残っている。
季節の木と書	字のフォントを変えることで、暖かさや涼しさなどを伝えることができた。それぞれ伝わってくる印象が異なる。字をみながら情景まで浮かんでくるのが凄いと思った。
書と精神性	「剛直忠勇の将」顔真卿の書は、線に厚みや力強さがあるが字形の面では形がまちまちで、九成宮のような均整な文字と比較すると確かに俗っぽい。しかし、温かさや人の心が感じられる。人間らしい字が見直されている今、このような精神性に富んだ字は、字を書く意味を我々に思い起こさせているのではないか。
行書の魅力(楷書と比較して)	日常生活では行書を使うことが少ないので、楷書と比較しながら、行書の魅力を探究した。書の奥深さ、読ませる字か魅せる字なのか、書体の違いにも関心をもっていたと思った。
仮名文字の成り立ち	中国から伝来した漢字を日本独自の文字へと昇華させていく中で、やさしく柔らかな雰囲気に変化したことが分かった。仮名文字同士のつながりは「文」を捉えやすくしている。
字の形による印象の変化	同じ文字を線の太さや大きさを変えて書くと印象が違って見えた。それを一つの絵のようにパネルに入れた。文字はコミュニケーションのためのものだけでなく芸術である。
墨の濃さと印象の違い	濃い墨では重苦しい印象を受け、淡墨では点画の重なりが立体的で軽く上品な印象になった。空海の飛白体のように刷毛を使って書いたら、普通の墨より重厚な雰囲気になった。
古代エジプトの文字	古代エジプトの人達は、「伝えたい」と思って複雑な形の文字を一生懸命に書いていたのではないだろうか。仮名や漢字の成り立ちも面白いと思った。
文字を彫る(刻字プレート)	様々な彫り方に挑戦した。なかなか思い通りにならなくて、自分が表現したいようには、ならなかったところもあるが、ミスをして味になった。文字に奥行きを出せたと思う。
象形文字	五書体の特徴を確認した。象形文字を気脈の貫通を意識して書いてみた
用紙による書の印象	書いているうちに、半紙を破ったらかっこよくなるのではないかと思い、やってみた。書く紙によって印象が変わるが、やっぱり1枚にまとめた作品には価値があると思った。
「古」を感じさせる書	王献之の書を参考にして、「自然」という字を書いた。書の歴史や書写書道の価値を知ることができた。どの作品も魅力的で、見ているととても楽しく、沢山の気づきがあった。

5-3. 今回の「探究」の課題

今後は、生徒たちによる主体的な探究活動を通して、これからの社会において出会うであろう様々な課題に対して、仲間とともに創造的、PISA 型学力の育成を図った「総合的な学習の時間」が期待されている。

今回は、作品に関しては十分に「探究」できたといえるが、レポート作成の時間を確保できず展示もかなわなかった。生徒の思考を深め探究活動を連続・発展させるためには、毎回の探究における情報を整理し、自分の考えを明らかにできるワークシートが必要であった。まとめ方については、「情報を再構成し、自分自身の考えや新たな課題を自覚すること」「相手意識や目的意識を明確にすること」「伝えるための具体的な方法を身に付け内容を明らかにすること」に配慮したい。また、最終回に発表鑑賞会を実施して共有し合ったが、中間発表の場を設定して他者との交流時間を設定すると協同的に解決しようとする意志や実行力が身に付くと考える。

- 1 静岡大学附属静岡中学校(杉崎)「人間形成のための国語科書写の追求」『教育研究情報 Vol.49』日本教育科学研究所編 pp.36-45 2017
- 2 杉崎「中学校国語科書写における発達段階に対応した硬筆指導の方向性に関する考察」『書写書道教育研究』第26号(全国大学書写書道教育学会編) pp.50-59 2012
- 3 「書の特質」『書の古典と理論 改訂版』全国大学書道学会編 光村図書 2020 pp.101
- 4 愛媛県四国中央市の四国中央紙まつりに行われる「全国高校書道パフォーマンス選手権大会」のほか、高校生が音楽に合わせて手拍子やダンスをしながら書道をする「パフォーマンス書道」を競ったり披露したりする大会が、各県で開かれている。
- 5 1年学年の総合では、職業や自己の将来について追求し、2年学年の総合では、様々な文化を知り、その文化が形成されてきた長い年月や、そこに込められた思いを肌で感じる「文化」を、3年の学年総合では、学びの充実に向けて、教科の深化、発展的な探究の時間として、発展的なテーマを「探究」する時間を設定している。
- 6 杉崎「硬筆書写における『文字文化』の意識化」『書写書道教育研究』第36号 pp.37-42 2021
- 7 上掲書3にある古典の画像を使用した。
- 8 八柳・杉崎「毛筆文字の印象の分析 パート1:人工知能による定量化」pp.1-6、杉崎・八柳「毛筆文字の印象の分析 パート2:人工知能による診断をふまえて」pp.7-16『静岡大学教育実践総合センター紀要 巻32』2022
- 9 芸術出版社の発行する(1976年創刊)書道関係の雑誌
- 10 鈴木晴彦『常用漢字表』改定とワープロの進化』『文字文化と書写書道教育』pp.24-34 萱原書房、大熊肇『文字の骨組み一字体/甲骨文から常用漢字まで』彩雲出版 2009
- 11 中村不折(1866-1943)は、明治・大正・昭和期に活躍した日本の洋画家・書家。夏目漱石『吾輩は猫である』の挿絵や中村屋のロゴ等を手掛けている。
- 12 顔真卿(709-785)唐代の政治家・書家。蚕頭燕尾とは、藏鋒にした起筆が丸く蚕の頭のように、右払いの収筆が燕の尾のような形状をしていることをいう。
- 13 上掲書3 書が心の微妙な動きやあり様を端的に映し出すということを指す。
- 14 王献之(344-386)東晋の書家。王羲之の第7子。書に優れ父とあわせて「二王」と呼ばれる。
- 15 上掲書3 やり直しがきかない一回性のこと。線性、律動性ともいう。
- 16 飛白体:飛帛、飛白書、飛白体ともいう。刷毛状の筆で擦れたように書く書き方。
- 17 上掲書3 文字を素材とすることから、第一に挙げられる特質。
- 18 塚原望「言語を用いた『感情表現』に関する研究の動向」『早稲田大学大学院研究科紀要別冊26号』2019
- 19 故人の経歴や事績を方形の石に刻し、西晋以後は小型化して墓中に入れるのが流行した。
- 20 魏の夏侯玄が楽毅について著した小論。王羲之の楷書、光明皇后による臨写本も有名。
- 21 上掲書6